

音楽朗読劇

# うた わが愛の譜

～滝廉太郎物語～

令和2年1月9日(木) 午後4時開演  
[午後3時30分開場]

重要文化財 台東区立 旧東京音楽学校奏楽堂

東京都台東区上野公園 8-43



辰巳琢郎

Tatsumi Takuro

1958年8月6日生まれ。京都大学文学部卒業。在学中は「劇団そとばこまち」を主宰し、学生演劇ブームを創出。卒業と同時にNHK朝の連続テレビ小説「ロマンス」にて全国区デビュー。以来、知性・品格・遊び心の三拍子揃った俳優として活躍中。自ら企画した「辰巳琢郎の葡萄酒浪漫」「辰巳琢郎の家物語」は共に長寿番組である。「くいしん坊万才」以来地域おこしにも熱心で、2011年より観光庁アドバイザーに就任。「日本のワインを愛する会」会長。近畿大学文芸学部客員教授。国連WFP協会顧問。近著に「やっぱりくいしん坊な歳時記」「日本ワイン礼讃」などがある。



辰巳真理恵

Tatsumi Marie

1987年10月11日生まれ。ソプラノ。東京音楽大学卒業。同大学院二期会オペラ研修所修了。2016年「フィガロの結婚」にて東京二期会オペラデビュー。翌年には、(ベルリン・コーミッシェ・オーパーとの提携公演)東京二期会「こうもり」イダ役を日生劇場にて好演。透き通る清らかな歌声に父、辰巳琢郎譲りの芝居心を兼ね備えた注目の若手ソプラノ。昨年、CD「Ba,Be,Bi,Bo,Bu」にてメジャーデビュー。八王子FM「辰巳真理恵のBa,Be,Bi,Bo,Bu supported by ALBION」のパーソナリティーを務め好評。東京二期会所属。



田中由也

Tanaka Yoshinari

1959年生まれ。大阪音楽大学卒業。同大学院修了。現在、大阪音楽大学・声楽教授。特定非営利活動法人関西芸術振興会理事。関西歌劇団副理事長。朝比奈隆指揮の「ドン・カルロ」のロドリゴの大抜擢でオペラデビュー。以後多くのオペラで主役を演ずる。コンサートの分野でもベターヴェン「第九」「荘厳ミサ」、モーツァルト「レクイエム」「戴冠式ミサ」、フォーレ「レクイエム」、ヴェルディ「レクイエム」等、数多くのソリストを務める。平成元年度文化庁国内研修生。合唱の指導、ミュージカル分野でも積極的に活躍している。



亜聖 樹

Asei Itsuki

1988年生まれ。父は、関西を代表するバリトン歌手の田中由也。2007年、宝塚歌劇団入団。2014年、宝塚歌劇団を退団。以降は、弾き語りソロライブ、イベント、朗読公演、父とのジョイントコンサートなどに出演する傍らボーカル・話し方・演劇講師としても活動する。映画「水戸黄門」主題歌の歌唱や、「ハムレット」ガートルード役、音楽劇「星の王子さま」、藤岡勲十郎文芸シリーズなど、演劇でも多岐にわたって活躍中。



大貫祐一郎(ピアノ) Onuki Yuichiro

1976年生まれ。洗足学園大学音楽学部ピアノ科卒業。7歳からピアノを始める。大学在学中にNHK公開生放送、NHKホールにて前川清、田代ユリらと共演。卒業後もベギー・葉山、天童よしみ、五木ひろし、布原明、渡辺真知子ら多数のアーティストと共演している。シャンソン、ジャズ、ポップス、演劇と様々なジャンルで編曲依頼を受け、スタジオワークやライブ、大型コンサートにも参加。近年では井上芳雄、影吹真央、フィリップ・エマールとの共演をきっかけにミュージカルや舞台、テレビ、ラジオにも活躍の場を拡げている。

## 【滝廉太郎 年譜】

- 明治12(1879)年 8月24日 滝吉弘の長男として東京市芝区南佐久間町(現:東京都港区西新橋)に生まれる。滝家は江戸時代、日出藩(現:大分県日出町)の家老職を務めた家柄で、父・吉弘は大蔵省から内務省に転じ官僚として勤めた後、地方官として神奈川県や富山県富山市、大分県竹田市等に移り住んだため、廉太郎も生後まもなくから各地を回ることとなった。
- 明治19(1886)年 6歳 5月 神奈川県師範学校附属小学校に入学。
- 7歳 9月 父の異動にともない、富山県尋常師範学校附属小学校に転校。
- 明治21(1888)年 8歳 5月 父が休職となり東京に戻り、麹町尋常小学校に転校。
- 明治23(1890)年 10歳 4月 麹町尋常小学校を卒業し、前年大分に異動した両親のもとへ。
- 明治25(1892)年 12歳 1月 父の竹田への異動にともない、大分県直入郡高等小学校に転校。
- 明治27(1894)年 14歳 4月 直入郡高等小学校を卒業。
- 5月 上京し、従兄の滝大吉・民子夫妻の家に寄宿する。
- 15歳 9月 東京音楽学校(現:東京藝術大学音楽学部)予科に入学。
- 明治31(1898)年 18歳 7月 同校本科専修部を主席で卒業し、翌月、研究科に進む。
- 明治32(1899)年 20歳 9月 同校ピアノ授業嘱託、翌月、同校授業補助となる。
- 明治33(1900)年 21歳 10月7日 麹町区にあった博愛教会で洗礼を受けてクリスチャンとなる。
- 11月 歌曲集「四季」(「花」「納涼」「月」「雪」)を出版。
- 明治34(1901)年 21歳 3月 東京音楽学校編「中学唱歌」(廉太郎作曲の「荒城の月」「豊太閤」「箱根八里」を収録)が出版される。
- 4月6日 日本人の音楽家では2人目となる欧州留学生として出国。
- 5月18日 ドイツのベルリンに到着。
- 7月 斎太郎が編集した「幼稚園唱歌」(「鳩ぼっぼ」「お正月」などを収録)が出版される。
- 22歳 10月 ライツィヒ音楽院に入学する。
- 12月 肺炎を発病し、ライツィヒ大学附属聖ヤコブ病院に入院。
- 明治35(1902)年 7月 病状は改善せず、文部省より帰国命令を受ける。
- 8月22日 ライツィヒを発ち、ベルギーのアントワープ港からロンドンを経由して10月17日に横浜港に着く。
- 23歳 11月 大分の両親のもとへ身を寄せる。
- 明治36(1903)年 2月14日 ピアノ曲「憾」を作曲。これが廉太郎の絶筆となる。
- 6月29日 肺結核のため病没。享年23歳と10ヶ月。

※結核に冒されていたことから死後多数の作品が焼却されたという。現在ははっきりとその存在が確認されている作曲作品は34曲と決して多くはない。

## あらすじ

日本を代表する名曲「荒城の月」は、作詞・土井晩翠、作曲・滝廉太郎である。

二人はこの歌が完成した後で、たった一度だけ会う機会に恵まれた。

それはロンドン・テムズ川のチルベリー・ドックに接岸した若狭丸の船上でのこと。廉太郎は留学中に病となり、そのためドイツから帰国する途中であった。その折、二人は「テムズの月」という曲をいつか創ろうと約束をしたのだが、帰国後、廉太郎は23歳という若さで逝ってしまい、ついに叶うことはなかった。

それから40年。晩翠は70歳となって、あの夜の事を回想する…

天才音楽家と言われ国費で留学までさせてもらえるほど、日本の期待を一身に背負う青年は、芸術の完成を死によって断ち切られたが、果たしてそれは薄幸なことであったのか。短い生涯に残した数々の名曲は、永遠に人々の心に生き続け、

「滝廉太郎」という偉大な音楽家はいつまでも惜しまれ続ける。それに比べて自分は、長く生きて、たいした詩は創作できずにいる幸さがある…

土井晩翠は晩年に文化勲章を受章する程の偉大な詩人であったが、「芸術は常に未完成」であるということを感じるのであった。

## 登場人物

滝 廉太郎

土井 晩翠 (詩人)

滝 民子 (廉太郎の従兄・大吉の妻)

滝 大吉 (廉太郎の従兄)

幸田 延 (東京音楽学校教授/ヴァイオリニスト、ピアニスト)

幸田 幸 (延の妹/東京音楽学校の先輩)

鈴木 毅一 (東京音楽学校の学友)

由比 クメ (のちの東クメ/東京音楽学校の先輩・幸の同級生)

幸田 露伴 (小説家/延と幸の兄)

美佐子 (毅一の友人/銀座のカフェの女給)

滝 正子 (廉太郎の母)

美美 (大分・エビス屋旅館の養女)

小山作之助 (東京音楽学校教授)

ケーベル (東京音楽学校教授/ピアニスト)

エシケ夫人 (ライブツィヒの下宿の家主)

クララ (エシケ夫人の亡夫の姪/ベルリン大学医学部学生)

姉崎 嘯風 (評論家・宗教学者)

滝 吉弘 (廉太郎の父)

滝 トミ (廉太郎の妹)

## 劇中使用曲 ※太字の曲は滝廉太郎による作曲です。

### 第1幕

【メヌエット】

【**荒城の月**】(詞:土井晩翠)

【庭の千草】(アイルランド民謡)

【ムーンライト・ソナタ】(ベートーベン)

【**アヴェ・マリア**】(グノー)

【**即興曲 変イ長調**】(シューベルト)

【庭の千草】(詞:里見義)

【**即興曲 ハ短調**】(シューベルト)

【**即興曲 変ト長調**】(シューベルト)

【**ピアノソナタ**】(クレメンティ)

### 第2幕

【**荒城**】

【メヌエット】

【四季の滝】

【**花**】(詞:武島羽衣)

【**月**】(詞:滝廉太郎)

【**雪**】(詞:中村秋香)

【**箱根八里**】(詞:鳥居枕)

【**荒城の月**】(詞:土井晩翠)

【**鳩ぽっぽ**】(詞:東クメ)

【**別れの曲**】

【**健(うらみ)**】

## キャスト

辰巳琢郎 辰巳真理恵 田中由也 更聖 街 大貫祐一郎(ピアノ)

## 天才音楽家の愛と苦悩

原作◎野添 宏

滝廉太郎は、多くの人々に愛された音楽家である。明治十二年(1879)に、今日風に言えば高級官徳の家に生まれ、家族の愛につつまれて何不自由のない少年時代を過ごした。そして史上最年少の十六歳で東京音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)に入学し、早くから才能を認められた。二十歳で母校の助教授になり、二十一歳のときに「荒城の月」「箱根八里」などの名曲を世に送り、選ばれてドイツに留学した。

そこにはつねに人々の愛があった。人々だけではない。明治という時代、日本という国家もまた、その才能を受れた。その人生は二十三歳という若さで未完成のまま中断されたが、その音楽は長く後世の人々に愛されることになった。だが、若い音楽家にとって、愛されることはそのまま苦しみでもあった。家族の愛はともかく、親友や師友の愛のなかには、必ず期待という名の鞭が含まれていた。彼は自分の才能に鞭打って、その期待に応えなければならなかった。人格形成の途上にあつた若者にとって、この愛という名の鞭は、どんな叱責にもまして過酷なものだったに違いない。私が「わが愛の譜」で描こうと思ったのは、五線譜には表されることのない、その青春の苦悩である。

## 溢れるほどの探求心

上演台本・演出◎菅原道則

この作品を上演するにあたり、改めて滝廉太郎の生涯を紐解いてみた。様々な資料を読むと、滝廉太郎が本格的に音楽の勉強を始めたのが15~16歳。そこから23歳で亡くなるまでの約8年間は、彼の人生を凝縮したかのような歲月だったのではないかと。決して生き急いだ訳ではないのだろうが、どこかで焦りを感じていたのかもしれない。恋愛を始め、あらゆることに興味を持つ多感な時期に、それを抑制し自分の目指す明確なビジョンに向かって突き進んでゆく。その信念の強さは並みの人間ではないと思う。

おそらく、滝廉太郎のエネルギーの源は、音楽に対する探求心だったのではないだろうか。音楽の本質に触れたいと願い、何かに突き動かされるように活動した結果、たった23年の生涯ではあつたけれど、100年以上経った今もなお人々の心を動かす楽曲が多数残っている。私たちは単に歌い継いでいるのではなく、滝廉太郎という、ひとりの男の精神に感銘を受け、憧憬し、「日本人の心」を思い出させてくれる曲調に、言葉では言い表せないような居心地の良さを感じているのかもしれない。

彼を取り巻く人々もまた多才で、大きな影響力を持っている。滝廉太郎が亡くなったのが1903年。日本が戦争に突き進んでいく時代背景の中、このような才能溢れる音楽家たちが活動した。当時に比べれば今は随分便利な世の中にはなつたけれどどこか不安を感じるような混沌とした雰囲気は、そんなに違いはないように思うのだ。

純粋で吸収力が高く、向上心を持つ滝廉太郎の生涯、そして彼が生み出した楽曲を、現代に生きる俳優たちの身体を通して表現する。稽古をしながら、日本人の持つ感性は昔も今も普遍的な、と改めて思う。そしてこれからも、そんな感性を大切にしていきたい。

お客様にもこの作品を通して何かを感じていただけたら…。そんな思いを込めながら稽古を進めている。

### チケットのご案内

全席指定席 3,000円 (台東区民割引 2,500円)  
Confetti(カンフェティ)にて販売 ☎0120-240-540

### お問合わせ

江戸まちたいとう芸楽祭実行委員会事務局  
(台東区文化振興課内) ☎03-5246-1328  
<http://www.taitogeirakusai.com/>

製作:アーティストジャパン/制作協力:TOHOマーケティング株式会社

主催:江戸まちたいとう芸楽祭実行委員会